



JAPAN FOUNDATION

報道関係各位
プレスリリース

国際交流基金



JAPAN FOUNDATION

2018年4月27日
No. 2018-003-1/1

ウティット・ヘームムーン（小説家）×岡田利規（演劇作家、小説家）

『プラータナー：憑依のポートレート』

バンコク公演（世界初演）及びパリ公演（ジャポニスム 2018 公式企画）決定

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）アジアセンターと株式会社precogは、2018年8月22日（水）～26日（日）の5日間、チュロンコン大学文学部演劇学科ソサイバントムコーモン劇場（バンコク）にて『プラータナー：憑依のポートレート』を世界で初めて公演します

本作は、共に1970年代に生まれ、同世代である2人の芸術家を中心に立ち上げられた国際共同制作プロジェクトです。原作は、タイ現代文学の最前線を担う小説家であり、東南アジア文学賞セブン・ブック・アワードを受賞したウティット・ヘームムーン。日本の演劇作家・小説家であり、演劇カンパニー「チエルフィッチュ」主宰として知られる岡田利規が舞台化します。

バンコクでの世界初演後、フランスで行われる「ジャポニスム 2018」の公式企画として、2018年12月13日（木）～16日（日）にはポンピドゥ・センターでも上演が決定しています。その後、日本を含めた世界各国での上演に向けても調整しております。注目の国際コラボレーションによる最新作にご関心いただき、ご取材賜れますと幸いです。

記

『プラータナー：憑依のポートレート』

原作：ウティット・ヘームムーン

脚本・演出：岡田利規

セノグラフィー：塚原悠也

演出助手：ウィチャヤ・アタマート

出演：バンコクでのオーディションを経て選出した俳優

【バンコク公演】

日時：2018年8月22日（水）～26日（日）

会場：チュロンコン大学文学部演劇学科 ソサイバントムコーモン劇場

主催：国際交流基金アジアセンター、株式会社precog、一般社団法人チエルフィッチュ

助成：アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、公益財団法人セゾン文化財団

【パリ公演】

日時：2018年12月13日（木）～16日（日）

会場：ポンピドゥ・センター（フェスティバル・ドートンヌ・パリ/ジャポニスム 2018 公式企画）

主催：国際交流基金、ポンピドゥ・センター

共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、フェスティバル・ドートンヌ・パリ

製作：国際交流基金アジアセンター、株式会社precog、一般社団法人チエルフィッチュ

助成：公益財団法人セゾン文化財団



以上

当基金に関するお問い合わせ：国際交流基金 コミュニケーションセンター（広報担当：熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 / E-mail: press@jpf.go.jp

公演・取材に関するお問い合わせ：株式会社 precog（プリコグ） 担当：中村、川崎、水野

Tel: 03-6825-1223 / E-mail: info@precog-jp.net

ウティット・ヘーマムーン (小説家) × 岡田利規 (演劇作家、小説家)

『プラータナー：憑依のポートレート』



宣伝美術：宮村ヤスヲ / 宣伝美術素材提供：ウティット・ヘーマムーン

芸術家の半生をつうじて重なり合い衝突する身体。
そして、その身体をとりまくあらゆる境界線。

— 国、セックス、ジェンダー、エスニシティ、階級、
権力と反権力、過去と未来、成功と墮落、生と死 —

境界線がゆらぎ、分離・融合するとき立ち上がるものとは？
そして、演劇の構造自体をも拡張する演劇がここに生まれる。

バンコク公演【世界初演】 2018年8月22日(水)～26日(日)
@チュラロンコーン大学文学部演劇学科 ソッサイパントウムコーモン劇場

パリ公演 2018年12月13日(木)～16日(日)
@ポンピドウ・センター (フェスティバル・ドートンヌ・パリ/ジャポニスム2018公式企画)

※以降、日本公演を予定 (調整中)

【2018年6月 特設ウェブサイト オープン!】

公演・広報に関するお問い合わせ

株式会社precog (プリコグ) 担当:中村茜、川崎陽子、水野恵美

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿2-17-16-1階

Web: <http://precog-jp.net> E-mail: info@precog-jp.net TEL: 03-6825-1223 FAX: 03-5795-2602 (平日10:00～19:00)

作品について

本作は、共に1970年代生まれ、同世代である二人の芸術家、ウティット・ヘームムーン（タイ）と岡田利規（日本）を中心に立ち上がった。

東南アジア文学賞、セブン・ブック・アワードを受賞し、タイ現代文学の最前線を担う小説家、ウティット・ヘームムーンと、日本の演劇作家・小説家であり、演劇カンパニー「チェルフィッチュ」主宰として知られる岡田利規。2017年6月にタイで出版されたヘームムーンによる最新小説『プラータナー：憑依のポートレート』（タイ語タイトルは“Rang Khong Pratthana”）を、岡田の演出によって舞台化する。現代社会への鋭い視座をもって創作を続けるヘームムーンと岡田の芸術家としての思考が、ここで初めて融合する。

ヘームムーンの小説の主人公は一人の芸術家である。1990年代初頭から現代に至るその半生、性愛遍歴を描きながら、同時に芸術家が住む国家であるタイの歴史、政治変動の流れが投影されるという、小説のアウトラインに岡田が強く共鳴したことから、ヘームムーンの小説を演劇化するという構想が展開した。一人の芸術家の人生を描きながら、そこに演劇ならではの手法で国家と身体、性的な営みと政治変動を重ね合わせ、岡田の演劇が構築される。

そして今回、contact Gonzoの塚原悠也が、初めてセノグラファーとして岡田とのコラボレーションに挑戦。「痛みの哲学、接触の技法」を謳い、殴り合いのようにもみえるパフォーマンスやインスタレーションの数々で国際的に活躍する塚原の参加により、ヘームムーンの原作小説から脱皮した、固有のパフォーマンスへの変容が加速するだろう。

コラボレーションの焦点となるのは、ヘームムーン、岡田、そしてプロジェクトチームのどれもが芸術家として活動していることであり、本作で語られる主人公も芸術家として同時代を生きていることである。一人の芸術家が、その芸術的活動とそれを取り巻く政治状況の中で自らの創作を探求しながら社会と葛藤し、多くの出会いと喪失を経験していく。

そこであぶり出されるさまざまな境界線は、政治と国家、支配と権力、欲望と身体、見る者と見られる者など、タイや日本に留まらず、国民国家という枠組みで生きる人間誰もが自ら設定し、また設定された状況で生きることを余儀無くされているものだろう。それらの境界線を越えることとはなにか。同時代を生きる芸術家たちの目を通じて捉えられる新たなビジョンにより、本作は演劇という芸術形式の境界をも拡張していく、意欲的な試みである。

2016年11月に始まったヘームムーンとの対話、継続的なリサーチの中で、岡田はタイの俳優とのワークショップ及び出演者オーディションを実施。そこで選出したタイの俳優に加え、タイ及び日本のクリエイティブ・メンバーを迎え、本作は2018年8月にタイ、バンコクにて世界初演、その後フランス、パリでの上演を予定している。今後のプロジェクトの進行と挑戦に、ぜひご注目いただきたい。

あらすじ

小説『プラータナー：憑依のポートレート』（ウティット・ヘームムーン著）
タイ語タイトル “Rang Khong Pratthana”（2017年6月 Juti出版）

2016年、バンコクに住む画家のカオシンは、Facebookを通じて連絡してきた若者ワーリーを自らのモデルとして迎え入れる。モデルは命を持つべきではないとの考えのもと、カオシンはワーリーと関係を結ぶことを拒みながら、その姿を描き続け、同時に自らの過去の性愛をワーリーに語って聞かせる。1992年の軍事クーデターと女性詩人、1997年のアジア経済危機と芸術大学の同級生、2006年の軍事クーデターと帰国子女の若い女性アーティスト、そしてレンタルビデオ屋の男性店員との三角関係。カオシンが人々と紡ぐすべての関係が身体・欲望・芸術のあり方をめぐって描かれ、その後景には常にタイの政治が存在する。ワーリーとの関係の背後にも、2014年の軍事クーデターがある。自分の描く絵の中に永遠を捉えておきたいと願うカオシンだが、その一方ですべての人々がカオシンの元から去っていく。人間の身体と、国家という身体の輪郭と欲望を、タイにおける政治・芸術・サブカルチャーの変遷を通じて描く長編小説。

プロGRESS

ウティット・ヘームムーンと岡田利規のコラボレーション

同時代に、別々の場所・別々のリアリティの中で生活し、現在をつぶさに観察することで独自の手法で作品を生み出して来た同世代の二人の作家、ウティット・ヘームムーンと岡田利規。度重なる民主運動や軍事政権、大災害など、異なる土地で二人がそれぞれに経てきた社会とそれへの眼差しが交差するとき、現実はどうな姿を現すのだろうか。

タイと日本で現代社会に潜む歪みや暴力をあぶり出してきた二人が、ヘームムーンの新作小説の舞台化という形でコラボレーションに挑む。

★インタビュー：ウティット・ヘームムーン——ひとりの物語から、拡張する芸術へ

<http://jfac.jp/culture/features/f-ah-uthis-haemamool/>

2016年11月：ヘームムーンと岡田による公開対談、バンコクでのリサーチ



公開対談の様子



バンコクでのリサーチの様子



2016年11月、クリエイションの第一歩としてバンコクにてリサーチおよび公開対談が行われ、同月にタイ語で出版された岡田の小説集『わたしたちに許された特別な時間の終わり』を起点に、演劇作家と小説家という立場から、互いの創作についての対話が交わされた。

2017年3月：バンコクとチェンマイでのリサーチ、俳優ワークショップ



2017年3月、ヘームムーンの小説に出てくるバンコクの土地や、会場候補地を訪れ、タイの歴史や社会状況についてのヒアリングを実施し作品のコンセプトを深めた。また、岡田は「Bangkok Art and Culture Centre」およびバンコクを拠点に活動している劇団「B-Floor」と「Democracy」のスタジオにて、俳優ワークショップを実施。

2017年4月：出演者・演出助手・制作助手のオーディション、バンコクでのリサーチ



出演者・演出助手・制作助手のオーディションを、6日間に渡って開催。オーディションを通じて、13名の出演者と演出助手・制作助手1名ずつを選出した。また、衣装家との時代背景とファッションの関係性についてのリサーチ、バンコクでの上演会場候補のリサーチ等も実施した。

公演詳細

『プラータナー：憑依のポートレート』

| バンコク公演

【世界初演】

2018年8月22日(水)～26日(日)

@チュラロンコーン大学文学部演劇学科 ソッサイパントウムコーモン劇場

| パリ公演

2018年12月13日(木)～16日(日)

@ポンピドゥ・センター（フェスティバル・ドートンヌ・パリ/ジャポニスム2018公式企画）

原作：ウティット・ヘーナムーン

脚本・演出：岡田利規

セノグラフィー：塚原悠也

演出助手：ウィチャヤ・アータマート

出演：バンコクでのオーディションを経て選出した俳優

バンコク公演

主催：国際交流基金アジアセンター、株式会社precog、一般社団法人チェルフィッチュ

助成：アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、公益財団法人セゾン文化財団



パリ公演

主催：国際交流基金、ポンピドゥ・センター

共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、フェスティバル・ドートンヌ・パリ

製作：国際交流基金アジアセンター、株式会社precog、一般社団法人チェルフィッチュ

助成：公益財団法人セゾン文化財団



ウェブサイト

precog : <http://precog-jp.net/>

チェルフィッチュ : <https://chelfitsch.net>

プロフィール

**原作：ウティット・ヘームムーン (Uthis Haemamool)**

1975年タイ中央部サラブリー県ケンコーイ生まれ。バンコクのシラパコーン芸術大学絵画彫刻版画学部を卒業。2009年に発表した3作目の長編小説『ラップレー、ケンコーイ』(The Brotherhood of Kaeng Khoi)にて作家としての地位を確立し、同年の東南アジア文学賞とセブン・ブック・アワードを受賞。さらにCNNGoにて、タイで最も重要な人物の一人として掲載された。2013年には京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAで実施されたアーティストワークショップ「Work in Memory」に、映画監督のアピチャップン・ウィーラセタクンとともに招聘講師として参加。同ワークショップに参加した日本のアーティスト6名との交流を通じて執筆した中編小説『残り香を秘めた京都』を発表。2014年から2015年までタイの文芸誌『Writer Magazine』およびタイ国文化省現代芸術文化局発行の文芸誌『Prakod』の編集長を務める。2017年6月『プラータナー：憑依のポートレート』(Rang Khong Pratthana)を発表、同年8月にはバンコクにて自らのドローイングと絵画による展覧会を開催。

**脚本・演出：岡田利規**

1973年横浜生まれ、熊本在住。演劇作家／小説家／チェルフィッチュ主宰。活動は従来の演劇の概念を覆すとみなされ国内外で注目される。05年『三月の5日間』で第49回岸田國土戯曲賞を受賞。同年7月『クーラー』で「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2005一次代を担う振付家の発掘」最終選考会に出場。07年デビュー小説集『わたしたちに許された特別な時間の終わり』を新潮社より発表し、翌年第二回大江健三郎賞受賞。12年より、岸田國土戯曲賞の審査員を務める。13年には初の演劇論集『遡行 変形していくための演劇論』、14年には戯曲集『現在地』を河出書房新社より刊行。16年よりドイツ有数の公立劇場ミュンヘン・カンマーシュピーレ(ドイツ)のレパートリー作品の演出を3シーズンにわたって務めた。

**セノグラフィー：塚原悠也**

1979年京都市生まれ、2004年関西学院大学文学研究科美学専攻修了。現在、大阪市在住。2006年にダンサーの垣尾優と共に「contact Gonzo」を大阪にて結成。公園や街中で「痛みの哲学、接触の技法」を謳う、殴り合いのようにも見える即興的な身体の接触を開始。個人名義の活動としては、2014年にNPO法人DANCE BOXの『アジア・コンテンポラリー・ダンスフェスティバル 神戸』や、東京都現代美術館の『新たな系譜学をもとめて 跳躍/痕跡/身体』展などでパフォーマンス・プログラムのディレクションを行う。また2014年より丸亀市猪熊弦一郎現代美術館にて始まったパフォーマンス企画「PLAY」にて『ヌカムリ・ジャミポス3部作』と名付けたパフォーマンス作品を3年連続発表。2011年～2018年、セゾン文化財団フェロー助成対象アーティスト。

**演出助手：ウィチャヤ・アートマート (Wichaya Artamat)**

1985年バンコク生まれ。タマサート大学映画専攻を卒業後、バンコク演劇祭のプロジェクトコーディネーターとして舞台芸術に携わる。2009年に「New Theatre Society」に参加したことをきっかけに、演劇の演出における様々な実験的試みや、型にはまらないアプローチを見出し、演出家として活動。特定の期間を通して社会がどのように歴史を覚えているか、またいかに忘れてしまうかを、様々な創造的な分野の人々とコラボレートすることによって探求することに強い関心を持つ。現代社会の現象や演劇形態それ自体に疑問を投げかけるためのプラットフォームとして、2015年「For What Theatre」を共同設立した。2014年と2015年には、演出作品『In Ther's View: a Documentary Theatre』と『Three Days in May』でそれぞれ国際演劇評論家協会 (IATC) タイセンターの賞を受賞。